「私を女にして欲しい」

ペリーヌ・クロステルマンが、そんな衝撃的な告白を受けたのは、とある日の午前訓練を終えた後のことだった。

しかも相手は５０１の中でも特に厳格な、あのゲルトルート・バルクホルンである。

訓練中も、宮藤芳佳やリネット・ビショップに対して、「判断が遅い」とか「隙を見逃すな」などとかなり厳しく指示を出していたのは記憶に新しい。

カールスラントという国の堅物なイメージをそのまま人間にしたようなバルクホルンには、もう随分と付き合いの長いペリーヌも、正直苦手意識を抱いている。

そんな相手からいきなり「女にして欲しい」なんて、聞こえ方によればとんでもない発言を受けて、冷静でいられるはずがない。

「そ、そんなっ！　いくら大尉の命令とはいえっ、わ、私はその……そんな趣味は……あ、でも坂本少佐なら」

冷静さを欠いて、自分自身もとんでもない暴露をしてしまっていることにも気づかず、ペリーヌは頬を紅く染めてしどろもどろに答える。

だが、そんなペリーヌの反応に、バルクホルンは「？」を頭に浮かべたような表情で首を傾(かし)げた。

「何を言っている」
「何って……ナニの話ではありませんの？」
「ナニ……？」
バルクホルンは自分が発した言葉を再度頭に浮かべて考える。
そしてすぐさま、ペリーヌにあらぬ誤解を与えてしまったことに気がつき、ペリーヌ以上に顔を真っ赤にして大声を張り上げた。
「なっ、何を不埒（ふらち）な勘違いをしているかっ！」
「さ、先に仰ったのは大尉の方ではありませんか！」
「う……あー、ゴホンッ！　クロステルマン中尉、君に私を女らしくして欲しい」
バルクホルンは何事も無かったかのように、文言を言い直した。
しかし、それでもペリーヌには言葉の半分も伝わっていないらしく、今度はペリーヌの方が頭に「？」を浮かべている。
「女らしく、ですか？　また急にどうして」
ペリーヌが疑問に思うのも当然だろう。
バルクホルンとは、この501が発足した当初からの付き合いだが、彼女が自身の在り方を変えようとしている所を見たことがない。
宮藤芳佳の入隊以後、一人で無茶をするような戦い方をしなくなったりと多少角が丸くなっ

た感はあるが、「カールスラント軍人たるもの〜」の口癖は変わることなく、軍人らしい厳格な性格や生活態度も昔から変わっていない。
それが今になって、どうして女らしくしようなどと考えたのか。
付き合いの長いペリーヌでなくとも、少しばかり頭が回る者なら、誰しもがそう考えるはずだ。
すると、バルクホルンはその理由について、特に隠すことなく話してくれた。
「実は、先日クリスに会いに行ったのだが――」
クリスとはバルクホルンの実妹である。
かつてネウロイとの戦闘に巻き込まれ、一時期は意識を失っていたものの、今は順調に快復の一途を辿っている。
ちなみにバルクホルンは愛妹家で、普段の彼女からは考えられないほどの甘さを妹相手には見せるほどだ。
前述の一人で無茶な戦いをしていたのも、妹を守れなかったことで自暴自棄になっていたためと言えば、バルクホルンの妹への想いが強いことも頷けるだろう。
「クリスから「お姉ちゃんはもっと女らしくした方がいい」と言われてしまってな。確かに料理や洗濯、掃除といった一連の家事はこなせるが、それはあくまで軍隊レベルの話だ」
口調はこのように堅物そのもの。服は軍からの支給品だけで過ごし、化粧っ気など微塵(みじん)もな

い。
　暇さえあれば体力作りに励み、当然と言うべきか色恋沙汰にはとんと疎いときた。
　それは自覚しつつも、軍人にそんなものは無用と割り切っているため気にもしていなかったが、いざ身内――しかも愛する妹から言われては、さすがのバルクホルンも己を顧みざるを得なくなったらしい。
「それで少しでも女らしさを身に着けようと思ってな」
「そうだったんですか……あの、でもどうして私なんですの？」
　何も自分に聞きに来なくても、この基地には他にも頼るべき対象はいくらでもいる。
にも関わらず、こうして自分の元を尋ねた来たことには、何か理由があるのではと、ペリーヌにはそう思えてならないのだ。
「例えばミーナ中佐とか」
　いつも柔らかな物腰を崩さず、それでいて軍人としての厳しさも備えた、バルクホルンから見れば手本のような性格ではないだろうか。
　それにミーナとバルクホルンなら、ペリーヌ以上に古い付き合いなのだから、相談だって持ちかけやすいはずだ。少なくとも自分よりはずっと。
「ミーナか……しかし、ミーナは司令官としての職務に追われ、いつも忙しいからな。私一人に手を煩わせるわけにもいくまい」

/00

こんな顔をしている戦友を見るのは久しぶりだ、と彼女は思った。
宮藤やリーネが『怒ると一番怖い』と話していたのを聞いたのはいつだったか。
目の前にいる上官は、それを体現する様に両手を顔の前で組んだまま、これでもかと言うぐらいに険しい表情を浮かべている。
「あなたは軍法会議の開催を望む事ができます」
普段に発される人への気遣いを感じられる優しいものとは違って、眼前にいる部下を強く弾劾する声が、二人だけしかいない静寂な室内に転がった。
「いいえ、結構です」
背筋を伸ばして直立不動のままに、短く必要な事だけを答える。
以前に各ウィッチの自主性を重んじ、旧態然とした軍隊からの脱却を目指しているとはいえ、些(いささ)かこの部隊には命令違反が多すぎるのではないかと。規律をもう少し厳しくすべきだと、彼女は上申した事があった。その時は自分がこんな風になるとは、欠片(かけら)も思ってなどいなかっただろう。
「あなたは飛行停止の上、自室待機の命令を受けていました。しかし本日の昼頃、それを無視して禁止兵装となっていたジェットストライカーを無断使用し、その際に基地備品を破損。そのまま許可なく戦闘に参加、ネウロイ撃墜後に意識を失い、試作機であるジェットストライカ

ーを全壊させる結果となりましたね。この報告に何か間違いは」
「全て事実です」
言い訳などするつもりは毛頭なかったのか、彼女自身は姿勢を崩すことなく再び簡潔に答えるだけだった。このような結末となってしまったのは、自分の責任に他ならないと言われるまでも無く態度で示している様でもあり、凛然としている。
「わかりました。それではあなたに処分を言い渡します」
そうして一つ、小さく息をついた。対する者は、身をやや強張らせて次の言葉を待つ。
「ゲルトルート・バルクホルン大尉、あなたには十日間の自室禁錮を命じます」
５０１統合戦闘航空団隊長であるミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐は、上官らしくぴしゃりとそう言い放った。

今まで軍人として生きてきた中で、上からの命令を違えた事など一度も無い。よって、今回の一件で生まれて始めて禁錮を受ける事となったバルクホルンだが、自分へと下された罰が不当に軽いものである事ぐらいは分かっていた。窮地に陥った仲間を助ける為の行動だという斟酌もあるのかもしれないが、彼女はそんなものは少しも欲しくはなかったのである。
命令は遵守されるもの。そして罪には痛みを。
それが大きなものであれば、きちんと両者を対応させなければならない。そうあって然るべ

きだと、心の中で何度も繰り返す。

「やはりミーナは身内に甘過ぎる部分がある……」

平素であれば、夜の基地はとても静かなものだ。しかし今夜は、長い廊下に不機嫌そうな足音が響いている。その主は、赤毛の上官に届かないとは知りつつも呆(あき)れた様に呟いた。彼女は有能な指揮官であると同時に慈悲深い人物であると、長年の付き合いから理解は出来るが、これではまるで部下に示しがつかない。同郷の間柄である故(ゆえ)のお目溢(めこぼ)しだと、心無い者からの誹(そし)りを受けても、そこに弁解する余地が無いからだ。バルクホルンはそれによって、自分だけではなくミーナまでもが不利益を被るのではないかと、忸怩(じくじ)たる思いだった。

歩を止めて、やはり先程の部屋へ引き返そうかと考える。

しかし処分を聞かされてから、すぐさまその正当性に異を唱えたものの、まるで取り付く島もなく『退出してよろしい』とだけ繰り返していた隊長を思い出すと、それが無駄でしかないのは明らかだった。

「もしかすると、私がこんな風に煩悶(はんもん)するのが本当の罰なのかもしれないな……」

それならば、これは責任感が人一倍強い彼女にとって最も厳しいものであった。

バルクホルンは少し重くなった両肩を落としつつ、また進み出す。その背中がやけに疲れて見えたのは、魔法力の枯渇(こかつ)だけに因(よ)るものではないだろう。

いくら暖かいロマーニャといえど、夜は冷える。首筋にぽとりと水滴を垂らされた様な錯覚

に、小さく身を震わせた。
「しかし本当に騒がしい一日だった。軍人になってから、一番だったかもしれない」
誰もいないというのに、また言葉を紡ぐ。
そして自分はこんなに壁に話しかけるのが好きな性質だったかと、苦笑した。
「とにかく今日は、もう休んでしまおう」
独り言はこれで最後だと言わんばかりに勢いよく言い切ると、ノブに手をかけて目の前にあるドアをそっと開いた。中で寝ているであろう、同室のハルトマンは滅多な事で起きたりはしない。しかしそれが気遣いをしなくていい理由にはならないと、そう考えるのがバルクホルンの為人（ひととなり）である。案の定、ジークフリート線の向こう側に広がっているゴミの山の中心にあるベッドの上には、こんもりと盛り上がったシーツで覆われた小さな山がまた一つ。
ゴミとベッドと窓から差し込む月の光で大方を構成されたような珍妙な室内で、時折可愛らしい寝息が混じる。それを聞いたバルクホルンの心に、僅（わず）かな寂寥感（せきりょうかん）が生じた。
別に帰りを待っていて欲しかったわけではなかった。だが今まで厳格な軍人たれと自戒し努めてきた己が崩れてしまった事が、彼女を精神的な不安定に陥（おちい）らせたのであろう。就寝してしまう前に誰かと。いや、最も心安い仲間であるハルトマンと言葉を交わしたかったのだ。
しかしその願いはどうやら叶いそうにもない。
バルクホルンは弱々しく数回頭を振ってから、リボンタイを解いた。

第501統合戦闘航空団の基地には風呂がある。
中でも野外の岩場に設えられたウィッチ専用浴場は、地上から空へと、雲を注ぐように湯気を湧かせていた。
501の所属ウィッチ全員を収めて余りある浴槽一面からは、白く靄が昇る。
壁はなく、天井と柱に囲まれた石造りの空間。その一角に、縁石にうつ伏せるようにして、丸めた上半身を湯船から浮かび上がらせる、シャーロット・E・イェーガーの姿があった。
「……ん、ん、ん、んんんっん～」
うろ覚えの母国の歌を喉の奥で転がす。
枕にした腕から窺うように覗かせた瞳には、高くに澄んだ青、低くに深い青、そしてそれらを横一線に切り分けた、対岸の薄い影とが見渡せた。
ロマーニャの初夏の最高気温は、七月ともなれば三十度を越える。
日差しも強く乾燥しているため、北欧から来たウィッチたちは辛そうにしているが、近い気温でも遥かに多湿だという扶桑からのウィッチや、この間までアフリカからこの辺りまでを転々としていた自分、そもそもこの国出身の妹分のようなウィッチにすれば至極過ごしやすい部類に入ると思った。
ふと、皮膚の表面に違和感を覚える。肩口に目を向けると、産毛がチリチリと踊っていた。
……うあ、肌がパリパリしてるよ。

今は空も太陽も高い時刻だ。天井は直上から降り注ぐ日光を防いでくれているが、海からの照り返しに対してはそうもいかない。無論、潮風もある。気分として平気だろうと、決して肌や髪に優しい環境ではない。

シャーロット、愛称で言うところのシャーリーは体を回して湯船に再び頭まで潜り込むと、浮かび上がるなり縁に頭を乗せ、ふう、と息を吐いた。

黒々とした影をまとった天井は高く、視界の隅には、塗りたくられたペンキのようにムラのない、濃い青空が見て取れた。

変わらず飛んでくる照り返しに、頬の熱と水気がたちまち飛んでいくのがわかる。

「いやあ、平和だねえ」

今日はいつ頃までこうしていようか、とおもむろに思案を始めたとき、

「――だからさー、早く申請出しちゃいなよ」

「くどい。あと、いきなり飛び込むなよ。この湯とてタダじゃないんだ――おいやめろ」

そんな声と、何かが湯船に飛び込む音が聞こえた。

＊　　＊　　＊

「……あん？」

完全に心身を弛緩させていたこと半分、単純に面倒くささ半分で、シャーリーはごろんと顔だけを横、浴場の入り口に向けた。今日は風が弱く、湯気は変わらず辺りを濃く覆っているが、浸かりながら近づいてくるらしい声は、水音と共に変わらず響いてきた。

「こないだの作戦がけっこー大規模だったじゃん？　昨日だし、今日だし、ミーナも上手くやってくれるって」

幼さはないが至極軽く明るい声。それとウチの中佐の呼び方から、シャーリーは今の胡乱な頭でも声の持ち主の察しがついた。合わせて、もう一人についてもだ。

「この間？　マルセイユが来たのはもう先週の話だぞ。それに次の作戦も近いと、他ならぬミーナから聞いている。そんな時期にのんびりとブリタニアまで行っていられるものか」

「それじゃあさ、船じゃなくて飛行機にしなよ。ガリアの上をビューンって飛び越えてさ」

食い下がるなぁ、とシャーリーは思った。

それだけ入れ込むような意味を含む会話なのだろうと察しを付け、傾注の度合いを強める。

「それこそ馬鹿を言うな。ガリアとロマーニャの国境線付近には未だネウロイの出現報告が出ている。５０６も、そのために作られたんだ。武装しなければ非常時には対応できない。そして今回は私用だ。よって、不可能だ」

透徹とした声に、理路整然とした言葉だった。ただ、それはシャーリーの記憶が正しければ、本来のものよりも補足に無駄が多い。目の前の相手を言い含めるというよりも、自分に言い聞

かせるためのそれだ。
……ていうか、あいつら私に気づいてないのか？
この浴場に入るに当たって通り抜ける更衣室は一つであり、当然自分の衣服も置いてある。にもかかわらず、会話は一向に自分を探す方向には向いてこない。もし見落としているのだとしたら、よほど意識が他所に向いているのだろうか。
「んじゃさ」
幾度(いくど)かの改めを置いて、軽い声が再度アタックをかける。
「足があればいいわけだよね。武器はトゥルーデが持っていけばいいじゃん」
「あくまで私用だと言っただろう。よしんば武装を携行する許可が出たにしても、私の都合に付き合わされる相手のことを考えれば、とてもそんなことは……」
あ、及び腰になってきた。
「遠慮してていいのかなぁ。クリスに会えるチャンス、ここにいる内はもうないかもよ？」
「……しかしだな……」
「探してみればいいじゃん。案外、近くにいるかもよ？」
最後の声は、殊更(ことさら)によく響いた気がした。あたかも、こちらに向けたかのようにである。
……なるほど。
気がつけば、頭はすっかり醒めていた。

「くぁ……あ……」
盛大な欠伸を隠しもせずに漏らしながら、エイラ・イルマタル・ユーティライネンは一人食堂へと続く廊下を歩いていた。
午前とはいえ、そろそろ朝と言うには遅い時分。本来であれば寝坊を咎められてもおかしくない時間帯だが、昨晩夜間哨戒に出ていた事を考えれば、まだ充分に早い。事実、共に夜間哨戒に出ていたサーニャ・V・リトヴャクは、まだ部屋で静かに寝息を立てている。
そんな、普段であれば間違いなく寝ているであろう時間。それでもこうして彼女が寝惚け眼をこすりながらも起きてきたのは、さしたる理由があっての事ではない。
一つは単純に寝ていられないほど暑かったという事だ。
第501統合戦闘航空団の再結成と共に、ここロマーニャに移ってから半年近くが経とうとしているが、日に日に強さを増していく日中の日差しと気温は、スオムスで生まれ育ったエイラにとって幾分辛いものになりつつある。
「……私にアフリカは無理だな」
廊下の側面、石造りの壁をくり抜いただけの窓から見える真っ青な空を眺めながら、ふといつだかに仲間から聞いた遠い地の話を思い出した。
仮に本国からそんな指令が出たところで、そうそう素直に従う気は無いが、世界の何処を見ても戦力不足は否めない。何時地球の裏側まで行ってこいと言われてもおかしくないのだ。

――オラーシャ方面なら、喜んで行くんだけどなー。
ペンキを塗ったような、そんな作り物めいた空に暫し想いを馳せる。
今度こそサーニャの両親を捜しに行く。
ヴェネツィア上空に現れたネウロイの巣を消滅させた今、それこそがエイラにとって最大の目的であり、目標だった。
「……っとっと」
外を眺めている間に少しばかり通り過ぎてしまったようで、エイラが二、三歩後ろに戻って、食堂のドアに手を掛けた。
「あ、エイラさん。おはようございます」
中には先客がいたようで、入ったところですぐに声がかけられる。聞き慣れたその声にエイラが台所の方を見ると、案の定見知った顔がこちらに笑みを向けていた。
「なんだ、宮藤か……」
「なんだ、ってひどいじゃないですかぁー」
拗ねたような声を上げる宮藤芳佳だったが、エイラが「悪い悪い」と片手を上げて謝ると、すぐに機嫌を直したのか、膨らませた頬を引っ込めた。
先のネウロイとの戦いで、自身の魔法力の全てを使い切った宮藤は、それでもそれまでと変わりなく、あるいは今まで以上に食事や洗濯など、出来る仕事に精を出していた。

空を飛べなくなる。
ウィッチならば誰しもにいずれは訪れる運命とはいえ、年齢による魔力の減衰であれば、程度の差はあれその固有魔法まで失う事はない。しかし宮藤の場合は完全なる魔法力の消滅であり、その代名詞ともいえる治癒魔法も、今はもう使えない。
とはいえ、当の本人は悲観する素振りなど微塵も見せず、むしろ清々しささえ感じさせる程だった。それは同じく魔法力の消滅という運命に見舞われた坂本美緒も同様であり、そしてそんな二人だからこそ、ネウロイの巣、その大元たるコアを破壊する事が出来たのだろうとエイラは思う。
「あれ、でもエイラさんって昨日夜間哨戒に行ってたんじゃ」
「なんだよ、私が早起きしたらダメだっていうのかー？」
ネウロイの巣を消滅させたとはいえ、それで全ての敵がいなくなったかといえば、そうとは言い切れない。
ヴェネツィア方面におけるネウロイの殲滅、それも５０４に委任されるのだが、その引き継ぎが終わるまでの間、これまでと同じように５０１のメンバーが出動していた。引き継ぎの完了は既に数日後に迫っており、それが終われば完全に５０１は解散。つまりはこれが最後の仕事だった。
「まぁ、起きたというより起こされたようなもんだけどな」

独り言のように呟いたエイラの言葉に思い当たる節があったのか、宮藤が「あぁ……」と納得したように窓の外を見た。ここからでは窺えないが、ネウロイの巣を消滅させてからというもの、取材に来た新聞記者であったり、荷物や設備の運び出しであったりと、基地内は俄に人が増えている。

「でもなんだか楽しそうですよね、ああいうの」

「どこがだよ。サーニャが寝てるんだぞ、もっとその辺の事をよく考えて――」

続けようとしたエイラの言葉は、しかし自分の腹部から響いた音によって遮られてしまった。

「……宮藤、なんか食べる物ないか」

そういえば、腹が空いていたから食堂に来たのだ。

危うく何をしに来たのかを忘れるところだったとお腹をさするエイラに、宮藤は少し考えるような素振りを見せた後、

「もうすぐお昼ご飯になっちゃいますけど、どうします？　先に何か食べますか？」

「あー……そんな時間だったのか。どうするかな……」

今度はエイラが「んー」と考えるように眉根を寄せた。食堂に来るまで、なんだかんだと考え事をしていた時は気にならなかったが、いざ腹が空いていると思うと途端にその度合いが高まってくる。聞けば、もうすぐとはいえまだ昼食までは一、二時間はあるという。それならばとエイラは一つ頷いて、宮藤にお願いする事にした。